

序言

ロケッシュ・チャンドラ
小槻清明／水船教義 訳

1931年、とある仏塔で発見されてこのかた、ギルギット写本は、千におよぶ満月を数え、池田大作創価学会インタナショナル（SGI）会長という智慧と資質を備えた献身の人物に巡り会い、再生する時を待っていた。その幾世紀という時代を経た風格と、書写された樺皮が本来もつ魅力を保持しながら。これらの写本は、束縛なき靈感の申し子であり、輝くばかりの美しい書法の所産であり、パトロンたる王族の深い信仰の発露であった。また、施主と書写生を共に利益する赤誠の事業として発注された、これらの写本は、文字に書かれたロゴス（言葉）として固定され、生命を啓発するものとなった。祈りの行為の中に、彼らは経験世界における精神の美と行動のダイナミズムを、まばゆいばかりの形象物として表現した。

法華経は内奥から湧き出る精神の構想力を讃歎する。法華経ギルギット写本の一つは一切衆生に最高の知と徳を獲得させるために奉納されている。すなわち、知の集積と福德の集積（jñāna-sambhāraとpunya-sambhāra）という二つの集積を成就するために献納されたのである。施主たちの名前は、サンスクリット語のものと、中央アジアの言語のものがある。いくつかの名前はpharnaという語尾で終わっている。これは、アヴェスタ語のhvarenoあるいはペルシャ語のfarnahのことで、人を驚嘆させるほどの輝きにみちた光彩を放つ、精神に内在する光のことである。Farnahは「高貴なる栄光」という意味になる。そしてギルギット写本は、仏教経典の中の輝ける光彩ということになる。

これらの法華経写本は、壮大な時の詩編の中に我々を旅立たせる、内的宇宙の深淵である。池田大作会長は、これらの写本に新たな生命を吹き込み、この経典のダイナミックな奔流を理解するための重要資料を提供して、学術研究を

推進するのである。この豪華な写真版は、探求心をかきたて、感覚と意識を動かし、隠れた意味を探らせ、思想の発展の失われた軌跡を見出させようとするであろう。また、(経典の)物言わぬ言葉と格闘し、思考する精神(の人)と共鳴するであろう。

これらの写本は、ギルギットのパトラー・シャーヒ(Paṭola Śāhi)王朝時代に筆写された。この王朝の歴代の王の名が奥書に記されている。すなわち、「宝星陀羅尼経」(Ratnaketu-parivarta)の奥書には、スレーンドラ・ヴィクラマーディティヤ・ナンディ(Surendra-vikramāditya-nandi)王の名がある。父のヴィクラマーディティヤ・ナンディ(vikramāditya-nandi)と母のスレーンドラマラー(Surendramālā)の名も共に記されている。

ハトゥーン(Hatūn)碑文とダニョール(Danyor)碑文、旧唐書、no. 31のブロンズ像、ギルギット写本群の奥書とその書体にに基づき、オスカル・フォン・ヒニューバーは、西暦630年以前と、630年以降、および725年以降のパトラー・シャーヒ王朝の歴代の王の名前を列挙したリストを作成した。旧唐書には、696年と713年に唐の宮廷に使節を派遣したギルギット王に関する言及がある。この王は、no. 31のブロンズ像を寄進したナンディ・ヴィクラマーディティヤ・ナンディであったに違いない。唐の宮廷は、717年に蘇弗舍利支離泥(Su-fu-shè-li-chih-li-ni)を(大勃律王として)承認している。唐の宮廷が最後に承認した王、スレーンドラーディティヤ(Surendrāditya)は、720年から725年までの間、この地を統治した。

ジャヤ・マンガラ・ヴィクラマーディティヤ・ナンディ(Jaya-maṅgala-vikramāditya-nandi)王のダニョール碑文は、730年という製作年代が特定されている。これらの(ギルギット)写本は王朝の安定を願って発注されたものである。小さな樺皮の巻本に書かれた孔雀明王経(Mahāmāyūrī)とマントラは、シュリー・ナヴァスレーンドラ(Śrī Navasrendra)王を守護するために奉納された。ヒニューバーは、古文書学の成果を根拠に相融経(Saṃghāta-sūtra)の書写年を627/8年と想定している。ギルギット写本群の書写年は、大まかに言って7世紀のものと推定できる。(Oskar von Hinüber, *The Paṭola Śāhīs of Gilgit – A Forgotten Dynasty*, typescript with L. Chandra)

渡辺照宏によれば、ギルギット写本の法華経は、三つのグループに分類される。

すなわち、以下のグループA, B, Cである。

グループA 8行本

インド国立公文書館 serial no. 45

RV/LC nos. 2813-3052

渡辺 1. 1-173 (写真版)

2. pp. 3-178 (ローマ字版)

3. 351-355 (写真版 結び 寄進者名あり)

4. pp. 293-294 (ローマ字版 結び 寄進者名あり)

グループB 9行本が主体

インド国立公文書館 serial no. 44, 47, 49, etc.

RV/LC nos. 3217-3220

渡辺 1. 247-350 (写真版, ほぼ9行本, 8, 10, 11行本を含む)

2. pp. 181-292 (ローマ字版)

戸田 p. 249: N.B.: "right parts of 2785-86 and 2801-02"

pp. 300-303 (10行本)

pp. 303-304 (Bapat, 10行本)

グループBは主として9行本であるので、これら10行本のフォリオと断簡は別のグループのもの可能性がある。

グループC 11行本

(i) 大英図書館 レヴィ JA. (アジア協会誌) 220

渡辺 1. Ia-VIIb (写真版)

2. 297-307 (ローマ字版)

KN 251-257, 272-275, 436-439, 443-445, 481-487

(ii) RV/LC nos. 3121-3216 (48葉)

戸田 pp. 249-300

KN 28-32, 46-49, 51-53, 55-57, 59-61, 63-70, 71-85, 87, 88, 90, 91, 93, 192, 233-235, 237, 243-244, 280, 282-284, 286-292, 294-297, 304-317, 321-323, 331-337, 342-348, 352-355, 358-365, 373-376, 378-382

グループK 8行本 (グループAに属する可能性あり)

Sir Pratap Singh Museum, Srinagar

Edited by Oskar von Hinüber *A New Fragmentary manuscript of the
Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Tokyo 1982

ギルギット写本は、筆跡やその他の要因を考慮し、各葉の行数によって整理することが可能である。Serial nos. 44 and 49の10行本は、同じ行数のグループBに含めることができるが、serial no. 47は9行本の、新たなグループDを構成するのかもしれない。

ラグ・ヴィラとロケッシュ・チャンドラによる、*Gilgit Buddhist Manuscripts*, parts 9 and 10の写真版の内容は次の通りである。

2813-3052	8行本	Archives no. 45	グループA
3053-3120*	9行本	Archives no. 47	グループB
2785-2812	10行本	Archives no. 44	グループB (?)
3217-3220	10行本	Archives no. 49	グループB
3121-3216	11行本	Archives no. 48	グループC

これらの写本は、その正確な内容を明らかにするために、将来ローマ字に転写する必要がある。渡辺のローマ字本版は、ギルギット写本の読みを正しく反映しておらず、テキスト批判を行う際、誤った結論に導く可能性がある。グループC (RV/LC nos. 3121-3216) 48葉の戸田宏文による原文の正確なローマ字転写は、現存する写本テキストの厳密なローマ字転写の模範となるものである。

ギルギット写本は、ネパール系写本の流布本より古い読みを留めている。グループC写本の読みを戸田のローマ字転写本から引用する。(右はケルン・南條本の読み)

RV/LC 3121	KN 28.2-29.5
abhūvan	babhūva
kauśalyu (詩語形)	kauśalya (古典語形)
vyuttiṣṭhata	vyutthito
hetoh̄ bahu-buddha-śata	hetoh̄ / bahu-buddha-koṭī-

nayuta-śata-sahasra

(koṭī-nayuta は後世の付加)

RV/LC 3122

KN 29.6-30.10

śāradvatīputra

śāriputra

以上の例から、ギルギット写本の読みが詩語形 (gāthā forms) を留めていること、(百千という) 低位の数に後世になって koṭī-nayuta (という高位の数) が加えられたこと、ケルン南條本の Śāriputra の代わりに原初形の Śāradvatīputra が使われていること、などが明らかになる。この經典のテキストの変遷のあとを辿るために、数々の異読を詳細に注記した校定本 (a critical edition) の完成が焦眉の急となっている。

ギルギット写本は、4つある仏塔の三番目の地下室に収蔵されていた。この三番目の仏塔の地下室は二重構造で、下部は22×22フィート、上部はそれぞれの一辺が2フィート下部よりも短くなった正方形である。部屋の中央に5つの木箱があり、その5番目の木箱は、他の(4つのうちの一つの)木箱の中に入っていて、その中に写本が収蔵されていた。パトロンであった王族の名を奥書に記す写本もある。この敬虔な信仰による行為は、法華経第28章の普賢菩薩の次の言葉に適っている。「求索せん者、受持せん者、読誦せん者、書写せん者は、是の法華経を…応に一心に精進すべし。…是の陀羅尼を得るが故に、非人の能く破壊する者有ること無けん。…我が身も亦た自ら常に是の人を護らん。…若し但だ書写せば、是の人は命終して、当に初利天上に生ずべし。」(創価学会版『妙法蓮華経並開結』pp. 669-672) 普賢菩薩は、この後も、自らが神通力をもって法華経を守護するように、帰依者にもこの経を書写し、読誦し、あらゆる手段を講じて守護することを勧める。

ギルギットの仏塔から出土した法華経は、堅固なロゴス(言葉)の精髓であり、秘蔵語の集積による卓越した悟り(無我の悟りの金剛の言葉の集まり、Bodhinairātmamyam vākya-vajra-samāvaham)である。

偉大な教師である池田大作会長は、今回二点目の、最も古い法華経写本(の写真版)を私たちにもたらし、精神の眼で見つめつつ、私たちの生活を祝福し、法の気高さによって日々の営みに労苦する私たちを元気づける。この写真版は、

偉大な先生の天空のごとき心からこぼれ落ちた珠玉の一滴である。造塔延命功德経（『大正新脩大藏経』1026）の智慧（Prājña）の言葉によれば、一切衆生への慈悲は導きの原理であり、菩提を求める心は実践と倫理的活動の基であるということになる。幾世紀もの長きを生き延びてきた、この樺皮の法華経は、完成された日本の技術によって、その光彩を再び放ち、無窮の尊厳なる生命と融合する。この写本は、流布本よりも古風な表現をもって私たちの眼前に現れ、躍動する精髓を心に深く刻みつける。池田先生は、日蓮大聖人、鳩摩羅什と共に法華経を継承する頂点に立つ一人である。彼は、法華経を斬新で新鮮なかたちで現代に印象づけた。あたかも画家が、広大なキャンバスに秀逸の絵筆で、気品に満ち、洗練された筆致で、陰影に富む重層的な絵に仕上げていくかのように、彼は、微妙かつ明快な法華経の解釈を、様々に思考した末の驚嘆すべき人生への解決の決め手として提供する。

彼の膨大な著作によれば、法華経の意味するところは、多事中の最も単純な本質としての行動と、様々な視点の融合ということになる。彼は、客観的基準に基づいた新鮮な物の見方を提供し、無数の人々の人生を歓喜に満ちたものとする。カシュガル（ホータンと称した方が良い）やギルギットの写本に見られるように、法華経もまた、これまでの長い流伝の過程でダイナミックな開花を見てきたのである。今回完成するギルギット写本の美しい複製版は、人間の営為の偉大さを知らしめ、池田先生の2010年の平和提言によれば、我々が「生命の奥底に築かれた精神の勝利の物語の主体者」（趣意）となるのである。法華経は高度な意識であり、先生は生命のダイナミックな啓発であり、我々は行動の地平にいる。人間精神の宝と輝く、驚嘆すべき樺皮の写本の出版がここに完成した。

References

- Hinüber 1982: Oskar von Hinüber, *A New Fragmentary Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Tokyo, The Reiyukai.
- KN: H. Kern and Bunyiu Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica X, 1908-1912.
- Lévi: Sylvain Lévi, *Journal Asiatique* 1932: 14f.
- RV/LC: Raghu Vira and Lokesh Chandra, *Gilgit Buddhist Manuscripts* (facsimile edition), New Delhi, International Academy of Indian

Culture, Part 9 (2326-2908), Part 10 (2909-3368).

- Toda 1979: Hirofumi Toda, *Saddharmapuṇḍarīka Gilgit Manuscripts* (Group B and C), *Tokushima Daigaku Kyōyōbu Kiyō*, vol. 14. Group B: RV/LC 3121-3216, Group C: RV/LC 3217-3220, Bapat 171ab (ABORI. 1950: 30.3-4 pl. III).
- Watanabe: Shōkō Watanabe, *Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit*, Parts 1, 2, Tokyo, The Reiyukai, 1972, 1975.
- Watson: Burton Watson, *The Lotus Sutra*, New York, Columbia University Press, 1993.

* 訳者注：3119-3120 はグループAの奥書の可能性が高いが、ここは暫時このままにする。
詳しくは179頁を参照。

(Lokesh Chandra / インド文化国際アカデミー理事長)
(訳・こつき はるあき / 東洋哲学研究所委嘱研究員
みずふね のりよし / 東洋哲学研究所委嘱研究員)